

環境安全管理室の 生き立ちと現状

■ ■ ■ ■ ■ 環境安全管理室長 川島 隆幸
(化学専攻 教授)

国立大学の独立法人化に伴い、人事院規則に代わって民間企業等に対してと同様、労働安全衛生法が適用されることになった。この法律の目的は、労働災害の防止のための危害防止基準の確立、責任体制の明確化および自主的活動の促進など、労働災害の防止に関する総合的・計画的な対策を推進することにより、職場における労働者の安全と健康を確保するとともに、快適な職場環境の形成を推進することにある。

一方で、労働者は事業者その他の関係者が実施する労働災害防止に関する措置に、協力するよう求められている。安全衛生面で不備がある場合には、労働基準監督署の指導の下、是正勧告および使用停止命令、さらに罰則の適用もあり得る状況となる。学生は、一部を除いて大学と雇用関係にはないが、法律の趣旨から、労働者と同等に扱うことが大学のとるべき姿であるとし、本学では学生を含めた全構成員を対象とすることになった。

東京大学は、3キャンパスを含め全15事業場に分けられた。理学系研究科は、本郷事業場に所属することになり、植物園は、理学系研究科の附属施設ではあるが、独立した事業場となった。

東京大学には、全学の安全衛生管理室が設置され、大学全体の安全衛生管理に関する情報提供および所轄監督署との連絡を行っている。各事業場には衛生委員会が設けられ、月一回開催されている。各事業場の下に、各部署の安全衛生管理室が設置され、部署の安全衛生管理を行っている。

理学系研究科の場合は、環境も大事ということで、他部署と異なり、環境安全

管理室と命名した。遺伝子実験施設および素粒子物理国際研究センターの2部署の管理も任されている。全学の安全管理委員会の放射線管理部が独法化後も存続することになったため、理学系研究科においても放射線管理室を組織的には独立させたが、放射線管理者は環境安全管理室の室員となっている。

室員は、室長の小職の他、安全衛生管理者として、物理学専攻の早野龍五教授、技術部の吉田和行技術専門職員、原子核科学研究センターの大城幸光技術専門職員の3名、化学物質担当者として化学専攻の橘和夫教授、放射線管理者として放射性同位元素研究室の小橋浅哉助教授、バイオハザード担当として生物科学専攻の川口正代司助教授、事務から松浦俊夫(発足当時は利根川伸一)施設係長および神山忍副事務長にお願いしている。さらに、業務委託の事務担当として井上阿佐子氏に週2回来ていただいている。理学系研究科担当の産業医である奥田俊洋先生には、産業医の巡視では大変お世話になっている。その他、必要に応じて関係者にオブザーバーとして、毎月一回行われる環境安全管理室会議に出席していただいている。

理学系研究科では、独法化の前に、不明試薬、廃棄試薬の処理を行い、いち早く環境整備に取り組んだ。また画期的なこととして、先の事務担当者を研究科の予算で雇用した。さらには、薬品管理システムの導入を行った。その後、全学で理学系研究科と異なる薬品管理システムの導入が決定され、最終的には理学系研究科も全学のシステムを採用することになり、残念な結果となった。これらは、いずれも理学系研究科が先行して行ったものであり、岡村定矩前研究科長をはじめ、理学系研究科教員全体の意識の高さが現れた結果である。さらに、安全衛生

教育用のマニュアルの英語版冊子体の作成も、全学に先駆けて行った。

環境安全管理室では、全構成員に対する安全衛生教育の実施を目指しており、未受講の方はぜひ、管理室まで出向いて受けていただくようお願いしたい。

最近、ドイツに行く機会があり、化学実験施設を見学した。実験室の広さ、居室の充実のいずれをとっても、学生が授業料を払っているのはどちらの国かと思ってしまうほど、差が歴然としており、愕然とした。独法化に伴って、環境安全管理のハード面は少しずつ整いつつあるが、例えば局所排気装置の運転費、スクラバー交換などの維持費、作業環境測定費、また今後実施されるであろう高圧ガス保安法対応のための費用など、お金のかかる問題をどう解決していくかが、最大の問題となろう。

昨年度は、残念ながら理学系研究科から何件かの事故報告を全学へ提出することになったが、さらに注意を喚起することによって、事故のない安全な環境をつくるため、室員一同全力を挙げている。皆様のご理解、ご協力をお願いしたい。



■ 環境安全衛生教育の講義をする筆者

オープンキャンパス 2005 報告

井原 泰雄 (生物科学専攻 講師)

東京大学のオープンキャンパスが8月2日(火)から2日間にわたって開催され、盛夏のキャンパスを大勢の高校生が訪れた。初日となった本郷キャンパスの部では、理学部を含む9つの学部コースが用意され、参加者は安田講堂でのオリエンテーションの後に、各自の希望するコースに分かれて見学した。理学部コースでは、理学系研究科の各専攻ならびに関連する専攻・施設の協力を得て、バラエティ豊かな51の研究グループが総計476名の参加者を迎え入れた。また、これと並行して理学系研究科の大学院生・博士研究員による講演会が開催され、会場となった小柴ホールには熱心な聴衆が集まった。

理学部オープンキャンパスには例年多くの研究室に参加していただいております。このことを活かして一昨年度から、自由見学方式が実現されている。これは、参加者がパンフレットを頼りに思い思いの公開研究室をめぐり、研究室のスタッフや大学院生と直接対話しながら説明を受ける方式で、通常の講演会のように参加者に対して一方的に情報を流すスタイルとは、一線を画するものである。自由見学方式の要とも言えるのがパンフレットであるが、理学部では各研究室の公開内容と各建物の見取り図を掲載した装丁も美しい冊子を作成し、参加者全員に配布している。一方、自由見学方式を採用するにあたって問題となるのは、理学部の建物がキャンパス内に散在しており、建物間の移動が困難なことである。この問題を緩和するために、建物間の移動のガイド役として学生アルバイトの方々に毎年活躍してもらっている。また、昨年度より一部の専攻には理学部1号館での出張公開をお願いしており、これにより

公開場所を1号館周辺と2号館の2ブロックに集中させている。

ところで、東京大学のオープンキャンパスに参加するためには、事前の参加申し込みと、申し込み多数の場合には抽選に当たる運の良さが必要となる。しかし、オープンキャンパスの趣旨からすれば、参加したければ誰でも参加できるというのが理想の姿であろう。この理想に少しでも近づけようと、理学部では参加受け入れ人数を他学部より格段に多く設定している(2003年度400名、2004年度460名、2005年度500名)。講演会などを企画の中心とする場合には、会場の収容能力から自ずと受け入れ人数に上限が生じることになるから、多くの人が参加できるということも自由見学方式の利点の一つだろう。

さて、今年度の理学部オープンキャンパスは、基本的に昨年度の形式を踏襲したものになった。当日の研究室公開では、パネルやプロジェクターなどを使った研究内容の紹介に加え、機器の展示、実験デモンストレーションなど、各研究室でそれぞれ工夫を凝らした企画が準備され

た。高校生にとって、またとない貴重な体験になったのではないだろうか。

今年度からの新企画として、大学院生・博士研究員による講演会を小柴ホールにおいて開催した。講演は自由参加で、研究室公開と並行して午前と午後40分間ずつ行なった。午前の部は物理学専攻修士課程の竹内一将さん、午後の部は生物科学専攻博士研究員の若野友一郎さんが講演をした。また、講演会の司会を、大学院生の坂井南美さん(物理学専攻)と山本ラインさん(生物科学専攻)が務めた。いずれの講演も、高校生の視点を意識した、たいへん面白い内容になっており、これを機会に理学への関心を深めた参加者も多いのではないかと期待している。

こうして、今年度の理学部オープンキャンパスは盛況のうちに終了したが、これには企画、準備から当日まで、数多くのメンバーの協力が不可欠だった。なかでも、公開に協力いただいた各研究室、実行委員および広報委員の教員各位、事務部庶務係および広報室のメンバー、そして学生アルバイトの皆さんに、この場をお借りしてお礼申し上げたい。



理学部1号館前に集合する高校生たち

風と星を見よう ―― 木曾観測所一般公開レポート

中田 好一(天文学教育研究センター 教授)

天文学教育研究センター木曾観測所には、シュミット望遠鏡を利用するため全国から研究者が集まる。しかし、8月6日(土)は、一般の方がシュミット望遠鏡に触って、その動きを見ることができるよう、ドームが公開された。今年のテーマは、公開日チーフの樽沢が頭を絞って、タイトルにある通り「風と星を見よう」になった。私は「だあれがーかあぜえをみいたでしょう」という歌のことかと思ったのだが、大間違いで、観測所の隣にあって毎年一般公開を共催する、名古屋大学太陽地球環境研究所の太陽風アンテナを指してのタイトルであった。

例年の通り、公開日の前日は展示のポスターを印刷する人、望遠鏡デモの最終チェックをする人、講演会場の準備をする人、看板を設置する人、それぞれ大忙しである。天文センター三鷹からは、新任の三谷も応援に駆けつけて来た。毎年春に開いている高校生対象の実習合宿「銀河学校」の卒業生たちもやってきて、手伝いよりはお互いの近況交換で盛り上がっていた。

催し物の目玉は30cm望遠鏡を使った「昼間の星を見よう」で、地元の星空愛好家が作る「木曾星の会」会員の方は、担当の三戸と小型ドームを出たり入ったりして、薄曇りの空を見上げていた。雲の合間にアークツルスをお見せできたのは当日の空模様からすると上出来であった。

シュミットドームでは所員の青木と征矢野が「木曾星の会」の方と一緒に、シュミット望遠鏡の原理を説明したり望遠鏡を回して見せたりしている。早く帰ったそうな小学生の横でお母さんが「まあ、ドームって望遠鏡と一緒に動くんですね。昔から望遠鏡が回って行ったら空が

見えなくなるんじゃないかって心配でしたの。」と感動していた。

7月の初めに、彗星に探査機をぶつけてその様子を観測するディープインパクトという実験をNASAが行った。観測所でもその様子は観測する予定だったが、当日は残念ながら天候に恵まれなかった。そこで今回の公開では、おもにNASAが配給した動画を宮田が紹介した。出来がよいのには感心する。大学の情報発信もプロの手を借りるべきかも知れない。

順調に進んでいた公開日であったが、

あっという間に雲が出てきて、ドームを閉めると同時に土砂降りとなった。雷も鳴り出し大変にぎやかである。土居の公開講演「広がりゆく宇宙に『はて』はあるのか？」の聴衆の入り心配であったが、ふたを開けると満員で杞憂に終わったのはなによりであった。夕立ちの後にはスカッと晴れるかと期待したのだが、雲のきれが悪く、何十台もの車で9時過ぎまで待っていた方たちに、満天の星をお見せできなかったのが心残りである。



シュミット望遠鏡の解説。
右端に見える白のようなものが鏡筒の下端部。中央の台上に説明用の模型が見える。